子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2013年9月　NO.175

[もくじ]

2～ 3　青くて柔らかい…植松伸夫
4～ 5　映像の力でまちを元気に ～近年の撮影あれこれ～…久木田亮
6～ 7　高校教諭の手作り美術館・室戸美術館 ―夢・やればできる―…西本誠
8～ 9　土佐山アカデミー 次の百年のための学びの場づくり…内野加奈子
10～11　言葉の現場から41 ロンドン乞食のなぞ…広井護
12～13　高知市文化振興事業団7月～8月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「移ろい」宮﨑夏緒

公益財団法人高知市文化振興事業団

青くて柔らかい

植松　伸夫

僕は落ちこぼれの高校生だったと思う。…あ、「思う」ではなくきっぱりと落ちこぼれの高校生だった。小さい頃から勉強が嫌いな子供だったのだ。附属小の三年生のとき雑誌の文通コーナーに「勉強は大嫌いだけどそれ以外のことは何でも好きな人、文通しましょう」と投稿したところ全国から五百通あまりの便りが届いてずいぶんあせったことがある。世の中にはなんとも勉強嫌いの多いことよなぁ…とあきれたものだが、投稿した本人があきれている場合ではない。

さて、そんな勉強嫌いが教育熱心な親の勧めで学芸高校を受験することになった。当時はまだ男子学生は坊主頭で、規則ガチガチの学芸高校である。髪型も校風も自由だった附属中に通う身にとっては出家しろといわれてるようなもんだ。でも大丈夫。なんせ僕は勉強嫌い。勉強嫌いは成績悪い。成績悪いと入試には受からない。入試に受からないから出家する必要はない。

ところが…僕は何かの間違いで学芸高校に受かってしまったのだ。学力的に受かるわけがないから、きっと当時教職に就いてたウチの親父が裏から巧みに手を回したに違いない（↑県教委の方々、冗談ですよ。真剣に受け取らないでくださいね）。さておき、今にして思えばこれが僕の幸運の始まりだったといえるかもしれない。学芸高校に進学できたからではない。獰猛な獣達でいっぱいの檻に放り込まれた、か弱い兎は果たしてその檻の中での戦いに生き残ろうとするであろうか？ 秀才に囲まれた鈍才とて辿る運命は同じである。僕は入学早々にきっぱりと戦場から身を引き自分の興味ある物事（…つまり音楽ですね）に熱中し始めた。それこそが僕の幸運への第一歩だったのである。高校時代の三年間を迷うことなく音楽鑑賞と作曲活動の時間に充てることができたことは、後の自分にとって誠に幸いというほかない。

世の中とはうまくできているもので、進学校で勉学の道を諦めたからといって孤立したかというとさにあらず。「類は友を呼ぶ」という言葉通り、落ちこぼれは落ちこぼれ同士共感しあうものだ。同じく受験戦争を戦線離脱して画家を目指していた同じクラスの芝野公二君と僕はよく同じ時間を共にするようになり、音楽や映画や将来の夢について語り合うようになった。

「音楽で食ってなんぞいけるものか。甘えたこといってないで現実を見ろ！」

自分のことをそう叱咤してくれる友人達が多い中、芝野とだけは本音を語り合うことができたし、音楽・絵画と方向は違えど同じ「モノ作り」への道を夢見る人間が身近にいるというだけでずいぶん勇気づけられたものだ。

自身のバンド「EARTHBOUND PAPAS」での演奏

僕らは本当によく話をした。教室で、校舎の裏で、落合公園で、帯屋町で…。常に誰かに夢を語っていないとその夢が消えてしまいそうで不安だったのだ。そして語れば語る程それは現実に一歩ずつ近づいていくような気さえしていた。いよいよ輝かしい人生の幕が開かれようとしていたのだ。主人公役に心ときめかぬ役者なんぞいるものか。…ま、現実にはその後に長い長いイバラの道が続くわけだが、当時はそんなこと知るわけもなくただただ夢に酔っていた。

あれから早四十年近くの年月が過ぎ二人の落ちこぼれ高校生は、五十歳代も半ばになってしまったが、それでもいまだに初志貫徹。紆余曲折を繰り返しながらも辛うじてお互いの道を歩み続けている。夢を実現出来るのは決して頭脳明晰な優等生だけではない。劣等生だって信念と何があってもへこたれない図太ささえあればなんとかなるものだ。そしてそれらの気風は「若者が大いに夢を見てもよかった」当時の高知の自由な風土から生まれたものであることに間違いはない。

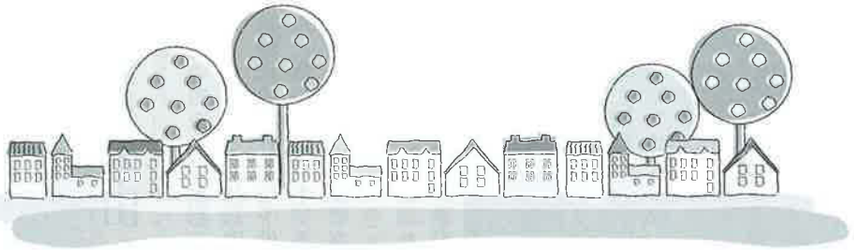
筆者

最近高知の街に活気がないと聞く。実際に帯屋町を歩いてもシャッターの下りている店が多いし、若者の姿も少ないように見える。故郷の高知が元気な街になってほしいと願いこそはするが僕は具体的な処方箋を持ち合わせてはいない。ただ、いつの時代も未来を築いていくのは若い世代である。

高知で暮らす若者達がいつもほがらかに笑っていますように。

彼らの胸の内が高知の抜ける青空のように高くどでかい夢ではちきれんばかりでありますように。

いまだに「高知」と聞けば若かった頃の無邪気な自由さを思い出し胸が熱くなります。自分にとってなくてはならない青くて柔らかな時代でした。



うえまつ　のぶお

一九五九年　高知市生まれ
作曲家。株式会社ドッグイヤー・レコーズ代表。
有限会社スマイルプリーズ代表。
http://www.dogearrecords.com/

これまでに全世界で九千六百万本以上を売り上げた、ロールプレイングゲームの金字塔「ファイナルファンタジー」シリーズをはじめ数多くのゲーム音楽を手掛ける。その功績はゲーム音楽に留まらず、フェイ・ウォンに楽曲提供をした「ファイナルファンタジーⅧ」のテーマ曲「Eyes On Me」は一九九九年度第十四回日本ゴールドディスク大賞においてゲーム音楽としては初の快挙となる「ソング・オブ・ザ・イヤー（洋楽部門）」を受賞。今や女性シンガーとして絶大な人気を誇るアンジェラ・アキにもシングル曲「Kiss Me Goodbye」を提供している。海外での評判も高まりを見せており、二〇〇七年七月に「Newsweek」誌にて〝世界が尊敬する日本人百人〟の一人に選出される。二〇一三年には、イギリスのクラシック専門放送局〝Classic FM〟がリスナーの投票により行うランキング「Hall of Fame（栄誉の殿堂）」において「ファイナルファンタジー」のサウンドトラックで第三位を獲得した。近年では日本国内をはじめ世界各国でオーケストラコンサートや自身のバンド「EARTHBOUND PAPAS」によるライブイベントを開催し好評を博す。

映像の力でまちを元気に
～近年の撮影あれこれ～

久木田　亮

「連続ドラマで、高知の四万十川を舞台にした若者の群像劇を作りたいという話が出てるんです」「でも、行ったことが無いし何も知らないんで、できたら誰かに車で案内してほしいんです」「実は…あさってそちらに行く予定です」

フィルムコミッションにそんな電話がかかってきたのは確か昨年六月のことでした。これがフジテレビ系列で放送されたドラマ「遅咲きのヒマワリ～ボクの人生、リニューアル～」に関わることになったはじまりです。

フィルムコミッション（以下、FC）とは映画やTV番組、CM撮影などの現地の相談窓口となる組織のこと。撮影を行うには様々なロケーション、申請手続きや地域住民への協力依頼、宿泊先やお弁当などの調達、エキストラの確保など地元に根差した情報が不可欠です。地域と連携しながら制作会社の要望に応え、スムーズに撮影が行えるよう調整するのがFCの役割です。

二〇〇〇年に日本初のFCが大阪に誕生して以来、全国の自治体や観光協会などがFCを立ち上げ、撮影誘致による地域のPRや観光促進などを目的に活動しています。高知県では、二〇〇四年に高知県観光コンベンション協会の中に高知フィルムコミッションが設置されました。一説には国内に二百近くのFCが活動していて、それぞれが撮影誘致に取り組んでいます。高知FCも設立以来、ほぼ毎年映画の撮影を受け入れてきたので、それなりのノウハウはあると自負していました。しかし、いきなり飛び込んできたこの話、連続ドラマの地方ロケ自体珍しい中、東京から遠い四万十で撮影ができるのか―。しかも十月放送開始なのに六月時点で四万十の予備知識はほとんどないという―。さすがに実現するのか半信半疑で空港にお迎えにあがりました。

その時いらっしゃったのはプロデューサー三名と脚本家さん。一緒に現場を回ってみると案の定、四万十が舞台になるか五分五分かなという印象でした。東京で生活に不安を覚えた若者が心機一転、田舎に移住し地元の若者たちと出会い共に成長していく―。ストーリーの方向性は決まっていましたが「四万十が舞台である必要はないのでは」という声が局内でも挙がっているというのです。思わず私も「どうして四万十なんですか？」と尋ねると、ドラマを企画したプロデューサー曰く「子供の頃に読んだ漫画『釣りキチ三平』のアカメの回の印象が強烈だったから」「四万十川でカヌーをするのが憧れだったから」。そんな個人的な動機で、四万十に決まるものだろうかと心配になったことを覚えています。

その後、紆余曲折はありながら地元の全面的な協力を得て、宿泊や輸送面も関係各所の協力があり、どうにかロケが決定しました。ただ、一番の決め手はその目で見た四万十川、高知の自然や暮らしぶりがドラマの舞台として魅力的であったことでしょう。ちなみに、脚本家さんが高知にいらしたのは、この下見の時と、ロケ中に高知市内に打合せに来られた時のみだそうで、僅かな滞在に関わらず、人付き合いの濃密な地方の暮らしや、返杯・献杯の文化など、見聞きしたことを上手に作品に盛り込まれていて感心するばかりです。余談ですが、私自身が関東出身の移住者ということもあり、ドラマの主人公・丈太郎には、大変親近感を覚えました。ひょっとして、丈太郎の何十分の一かは、自分がモデルになっているんじゃないか、と思ったりしています（笑）。

東京のスタジオに建てられたセット（「遅咲きのヒマワリ」）

香南市夜須町手結に作られた民宿「きよとお」（「県庁おもてなし課」）

一方、同じく昨年ロケが行われ今年劇場公開となった映画「県庁おもてなし課」は、高知県出身の作家・有川浩さんの同名小説を映像化した、県庁に実在する「おもてなし課」が舞台の作品です。これだけの条件が揃えば必ず高知で撮影が行われるものと感じられるかもしれませんが、意外にそうとは限りません。たとえば、東京の設定でありながら別の県で撮影をしたりすることは映像制作の業界では「よくある事」なのです。

ロケが全て無くなる事はなかったかもしれませんが、実際、大幅に減る可能性はありました。一番ネックになっていたのは高知県庁での撮影です。出演者のスケジュールの都合もあり、本物のおもてなし課で休日だけ撮影するという訳にもいかない。平日は業務がありますし庁内に空いている課室もありません。都内のセットや東京近辺の庁舎風の建物で撮影することも検討されつつありましたが、結局、県議会棟と庁舎を結ぶ渡り廊下にセットを作ることになりました。結果的に撮影がしやすいように作り込みができたうえに、映画に合わせ再現公開したロケセットは映画をきっかけに高知に来られた多くの方に喜んでいただけました。

近年、高知県では大掛かりなロケが続いています。昨年公開され日本アカデミー賞で最優秀作品賞を受賞した「桐島、部活やめるってよ」も高知市で撮影されました。俳優の奥田瑛二さんをプロデューサーに、監督を長女の安藤モモ子さん、主演を次女の安藤サクラさんが務める映画「0・5ミリ」も今秋の公開を控えています。また旅番組やグルメ番組のロケも増えているように感じています。こちらも、取り上げられるとある意味映画やドラマ以上にダイレクトに反響があります。同じ時間CMを流そうとすれば恐らく莫大な広告費が必要となるでしょう。しかしFC活動で誘致できればある意味タダ、強いて言えば私の人件費くらいしか掛かりません（笑）。映像制作者のニーズを捉え、お金を使わずにいかに高知をPRするか、そこがFC活動の醍醐味です。

高知中央高校でのロケ風景（「桐島、部活やめるってよ」）

高知は地理的ハンデから撮影隊にとって来にくい場所です。それでもコンスタントに撮影が続いているのは、一度来ていただければ高知でなければ撮れない画があると思っていただけるからだと思っています。まずは「高知は遠い」から「高知に行けば何かある」「高知は撮影しやすい」へ。そんな風に思っていただけるよう、まだまだ取り組むべき点は多く撮影のたび学ぶことばかりですが、やりがいを感じながら活動しています。最後に、撮影には地域の皆様のご理解とご協力が不可欠です。この文章をきっかけに、高知フィルムコミッションの今後の活動に関心を持っていただければ幸いです。

くきた　りょう

一九八〇年　茨城県生まれ
公益財団法人高知県観光コンベンション協会プロモーション部所属。
二〇〇八年、協会職員として採用され、以来、高知フィルムコミッションを担当。

高校教諭の手作り美術館・室戸美術館―夢・やればできる―

西本　誠

高校教諭の手作り美術館「室戸美術館」は毎月一回・一日だけ開館する美術館です。次回開催は二〇一三年九月二十三日（月・祝日）。入場無料です。高知県室戸市に遊びに来て下さい。

私たちの町には美術館がありませんでした。そこで「町の中にＡｒｔと出会える場所をつくれないか」「町の元気をもっと創りたい」「できることから、とにかくやろう」と、はじめたのが「室戸美術館」です。

Ａｒｔは人生が詰まっていると思います。みんなが志を持ってクリエイティブに生きたら、もっともっとすごい日本や、より素晴らしい地球になると信じているんです。いい作品やいい人と触れ合うのは、町にいる人々や私の元気の源になると信じているんです。

現在は、廃校となった室戸東中学校の教室の一部を借りて開催しています。四十点程の絵画や立体作品など、様々なＡｒｔ作品を展示しています。公的に感じる名前が付いていますが、まったくもって私設の美術館です。

なお、開催日以外は室戸美術館に入れない上、セキュリティの観点から作品も一部持ち帰っています。開催日をホームページで見ていただくなどして、ご注目・ご来館下さい。

室戸美術館は二〇一〇年から行っています。のべ一千名くらいの方に来館いただけたと思います。前回六月二十四日の開催では一日で二十六名のご来場をいただきました。

現在運営は地域の方のお力を借りて、共に行っています。最近ではオカリナ教室が開かれたり、押し花アート教室が開かれたり、茶会を催したり、カフェとコラボレーションしたり、参加してくれるアーティストが増えたり、私自身も協力して下さる方や来館下さる方から、多くの幸せと学びをいただいています。

現在も室戸美術館は、展示して下さる作家さんや、安定して開催するための場所、より多くの展示スペースや協力者を求めています。私たちの町に三百六十五日、Ａｒｔとの出会いの場や、観光客をおもてなしできる場など、より多くの元気があることが希望です。

飛び込みライブや出店、夢や悩みの表現など、予約なしでも大歓迎です。「かえっこ・室戸美術館バージョン」も実施しています。物々交換のようなものです。是非いらなくなった物等もご持参いただき、ご参加下さい。ぜひご来館ご協力、お願い致します！

ご来場下さった方々の声を一部ご紹介いたします。

「こんな出会いやセッション最高!!ありがとう！」

「室戸に美術館があるなんて嬉しいです。いろんな作品を見れて良かったです。」

「なんだか楽しくなりそうですネ！」

「久しぶりに絵を見て刺激を受けました。これからも新風を室戸に。（室戸市在住）」

「廃校に命を吹き込んでくださりありがとうございます」

「高知市内からハルバル！でも来て良かった!!」

ここで、室戸美術館の歩みをお話しします。発端は勤務する室戸高校にありました。「室戸の町好きだなぁ」「いいところたくさんだなぁ」「もっともっとなんかできんかなぁ」「美術館創りたいなぁ」と学校でつぶやいていると、とある生徒が私にこう言って来てくれました。「私たちも室戸の事が好きで何とか力になりたいんですが、何からはじめたらいいかわからないのです。」と。

その生徒が室戸美術館最初の開催地である、古民家の話も運んでくれたんです（おかげで金剛頂寺さん所有の「新村不動岩」の敷地一部を、無償で二年間自由に使わせていただきました）。彼女たちは当時高校三年生でした。二〇一〇年のことです。そして彼女たちと相談し合い、室戸を愛し行動する「６１０ｃｌｕｂ（むろとくらぶ）」というグループを立ち上げたんです（素敵な語呂合わせでしょう？）。その後仲間も増えながら、様々な新特産物を考えたり、イベントを企画して実行しました。中には今のところ案止まりのものもあるけれど、いつか芽が出る種だと信じています。

アイデアの中には室戸市長が採択してくださり、毎年実行されている「六月一〇日・室戸の日イベント」等もあります。今年で四回目になりました。今回の「室戸の日イベント」では町の皆様の夢を集めてトークセッションしたり、ライブしたり、オール室戸ロケの映画「いさなのうみ」を上映したり、ホットな一日をみんなで創りました（イベントを通じて室戸の皆さんの夢・現在二百九十二名分が、私たち実行委員会によりインターネット掲載されています。是非ご覧下さい！「夢集め」は、私個人としても室戸美術館としても、今後もずっと続けるので変化を見つめていただくと共に、投稿やご協力を是非お願いします。

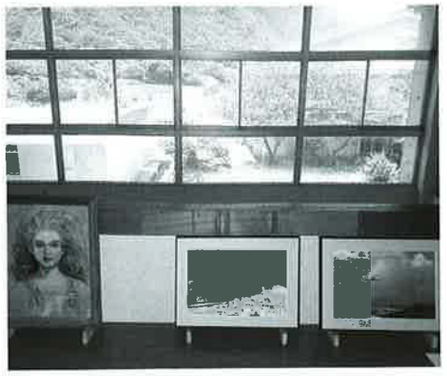
（http://plaza.rakuten.co.jp/610makoto/diary/201305060001/）。

そんな生活の中で、最初の古民家で室戸美術館を二年実施。その間、室戸市「吉良川の町並み」での「ひなまつりイベント」でも作品を展示したりしました（三百五十名来場）。その後、古民家の使用が都合によりできなくなり、現在の開催地である室戸東中学校（現在は廃校）に移転しました。今後、室戸東中学校は「室戸ジオパーク拠点施設」として、大々的な工事が始まる予定です。よって室戸美術館は二〇一三年十月あたりを目処に、また移転するかもしれません（未定です）。ホームページなどで告知していきますので、お見守りやアドバイス、よろしくお願いいたします。

繰り返しになりますが、室戸美術館は、安定して開催するための場所、より多くの展示スペースや協力者を強く求めています。私たちの町に三百六十五日、Ａｒｔとの出会いの場や、観光客をおもてなしできる場など、より多くの元気があることが希望です。あなた様のご協力・ご参加・ご来館を是非是非お待ちしております！

最後に。これまでたくさんのご協力者や来館者様、インターネットを通じたお会いしたことのない方々も含めた仲間たち（勝手に「地球のファミリー」と呼んでいます）、そして家族の協力なくして、これらの活動や出会いは今までもこれからもありません。すべてすべて宝物です。ここに深く感謝いたします。

これからも、どうぞよろしくお願いいたします！



●室戸美術館の次回開催日・二〇一三年九月二十三日（月・祝日）午前十時～午後六時十分。入場無料。

開催地・室戸市立室戸東中学校（現在は廃校。高知県室戸市室戸岬町三津一八一〇－二）。

お問い合わせは、室戸高校西本誠（０９０－３１８３－３７４５）。

メール（murotobijyutukan610club@gmail.com）

ツイッター・フェイスブック・室戸美術館ホームページ・ブログ・ＹｏｕＴｕｂｅ・ミクシィ・Ｇ＋等でも情報発信中です！ 美しい空と海、山河。美味しい食べ物。素敵な人々。是非室戸に遊びに来て下さい！

◆二〇一三年七月二十一日現在

ご協力作家・展示アーティスト・五十音順

石井葉子、イコ・ショージ、入野大智・千明、雨龍堂、岡崎壮、小原広司、郭伝コウ、門脇和花、笠原英二、川埜龍三、佐藤孝洋、島村立法、祖川タキ子、ソルファ多田、多田誠七、多田知生、遠近明子、中石摂子、中野洋平、平賀啓太郎、福岡美智恵、細木康平、光延由香利、宮崎一志、宮崎万純、森岡智子、山崎拓巳、山本高光、柚山宏光、横田章、横山博至、和気一作、和田美紗子。

にしもと　まこと

一九七五年　愛媛県松山市生まれ

一九九八年高知大学「特美」卒業。二〇〇〇年高知大学大学院修了。以後、高知北高校、柏島中学校、高知東工業高校、嶺北高校、岡豊高校での教員勤務を経て、二〇〇六年より室戸高校教諭。二〇〇七年室戸高校・春のセンバツ甲子園 旅行団長（応援日本一受賞。この甲子園の市民応援団輸送延べ九千人に関した町の皆様の大きな支えが、私の室戸愛の原点です）。室戸美術館館長。

土佐山アカデミー
次の百年のための学びの場づくり

内野　加奈子

百年先、というと、みなさんどのような世界を想像されるでしょうか？ 百年というと、あまりに先のことと感じる方も多いかと思いますが、世代でいうと約三世代先、顔の見える未来です。次の百年は他の誰でもない、私たち自身が作るもの。私たちが日々、どんな暮らしをするのか、どんな選択をするのか、という積み重ねこそが、次の百年を作っていくはずです。「土佐山アカデミー」は、顔の見える次世代のために、私たちに今、何ができるのか、これからの暮らしや社会のあり方を考え、具体的に行動していくための「学びの場」づくりを目指し、二〇一一年に設立されました。

拠点である土佐山地域は、高知市の水源にあたる鏡川の源流域。市の中心部から車で三十分ほどというアクセスのよさにも関わらず、美しい清流と緑深い山々に囲まれた地域です。古くから地域全体で人を育てる風土もあり、かつての村民憲章には、〝私たちは、教え教わる学習の村をめざします〟とあります。一九六〇年代には〝社学一体〟という言葉も生まれました。地域全体を学びの場にしながら、大人も子どもも互いに学び、教え合う、という土佐山の精神を受け継ぎながら、様々な知恵やアイデアが出会う場所をつくり、自然の恵みを活かした暮らしを形にしていくこと。「土佐山アカデミー」は、「地域で学び、地域で創る」をテーマに、百年先を想い、行動する人々が集う場を目指しています。

自然のしくみや、農や食のあり方、仕事づくりやエネルギーなど、取り上げるテーマは多岐に渡りますが、プログラム全体を通して、実際に手や身体を動かしながら学ぶ姿勢を大切にしています。土佐山というフィールドを存分に活かしたいという思いはもちろん、自ら行動し、経験することによる学びこそ本物の学び、と考えているからです。

プログラムは、実際に土佐山に暮らしながら学ぶ滞在型のものを中心にしながら、日帰りや一泊二日のワークショップといった、気軽に参加できるようなものまで様々。全国はもちろん、高知県内から参加してくださる方も多く、「街からこんなに近いところに、こんな場所があったとは」と、何度も足を運んでくださる方もいらっしゃいます。経験や年齢は一切不問、学びたいという思いがあれば、どんな方でも参加していただけます。これまでも二十代から六十代までさまざまな経歴を持つみなさんが集まり、多彩な人々が出会う賑やかな学びの場になっています。

この春に開催したプログラムでは、「五万円で家をつくる方法」といった講座も開きました。座学と実践を組み合わせながら、総工費五万円で小さな家を建てることに挑戦。家づくりというと、他人まかせになったり、お金がかかるものと決めてしまいがちですが、自分たちの手で作ってみる、と考えると、家について、さらには、暮らすということについて根本的に捉え直していく機会が生まれます。そもそも何のために家を作るのか？ 家を通して、どんな暮らしを形にしたいのか？ どんな素材を使って作るのか？ 実際に手を動かしながら、家づくりに向き合うプロセスすべてが、自分たちの暮らしそのものを新しい視点から見直す時間になっていきました。

「五万円で家をつくる方法」講座の一場面

「炭焼き」講座の一場面

学びはプログラムの中ばかりでなく、土佐山で過ごす時間そのものからも生まれています。自分たちの食べる物がどこからきているのか、毎日飲む水がどこからきているのか、土佐山では、私たちの命を支えるものが、手に取るほど近くにあります。街の生活では、なかなか感じることのできない、自然と自分との関わりをリアリティを持って感じることができるのは、土佐山ならではの魅力です。

炭焼きや土づくり、保存食づくりなど、土佐山の人々にとっては何気ない日常の中にも、自然と深く関わりながら生きる知恵がちりばめられています。土佐山の自然は、時に人を寄せ付けないかのような厳しい表情を見せます。豊かな自然というよりは、迫りくる自然、といった方が近いかもしれません。放っておくと呑み込まれてしまいそうな勢いのある自然です。そうした自然と向き合いながら育まれてきた暮らしの中には、私たちがいつの間にか手放したり、失ってきた力が、今も生き生きと息づいています。

自然は本来、とても豊かなものです。自然と寄り添って暮らすというのは、何かを無理に我慢したり、原始的になるということではなく、豊かな自然の恵みを活かした暮らし方を学び直していくことではないでしょうか。古くからの知恵を借りながら、新しいアイデアを取り入れ、調和のある暮らしを形にしていくこと。その〝学び直し〟のプロセスは、とても楽しくやりがいのあるものです。土佐山の日々の中には、そのためのヒントが詰まっているのです。

高知市土佐山の集落

これまでの参加者のみなさんからは、「生きる基本を学んだ」「価値観・世界観が大きく拡がった」「自分が自然の一部であることを実感した」「身近にあるものを生かし、自ら創りだすことを味わった」といった声が寄せられてきました。これからも土佐山ならではの魅力にスポットライトを当てながら、より多くの新しい出会いやアイデアの生まれるきっかけを作り、発信していけたらと考えています。

□お知らせ

土佐山アカデミーでは、参加者を随時募集しています。日帰りから一ヵ月単位のご参加まで、プログラムの詳細は、公式サイト http://tosayamaacademy.org をご参照ください。

うちの　かなこ

一九七六年　東京生まれ

土佐山アカデミー ディレクター。ハワイ大学院で海洋学を学び、日米の教育機関と連携しつつ、自然をベースにした学びの場づくりに携わる。海図やコンパスを使うことなく自然を読み航海する伝統航海カヌー〈ホクレア〉の日本人初クルーとして、歴史的航海となったハワイ―日本航海をはじめ、数多くの航海に参加。著書に『ホクレア星が教えてくれる道』（小学館）

言葉の現場から 41

ロンドン乞食のなぞ

広井　護

芥川龍之介の短編「父」の中に、衝撃的なシーンがある。旧制中学校四年生（現在の高校一年生）の少年が、友人達の面前で父親を「あいつはロンドン乞食さ。」と言い放つ場面だ。思春期、反抗期の少年と親の関係が、残酷なほどリアルに描かれている。

場所は上野駅の停車場。日光への修学旅行に出発する直前、中学生グループの中で起こった一見ささいな出来事である。

「父」は、文庫本で八ページの小品で、「自分が中学の四年生だったときの話である。」という語り出しから始まる。

語り手である「自分」は上野へ向かう電車に乗ったとたん、クラスの人気者、能勢五十雄に声をかけられる。「能瀬は自分と同じ小学校を出て同じ中学校へ入った男である。」と紹介される。このとき能勢は、自分のことを「僕」と言っている。

彼は電車を降りると他の友達といっしょになって、憑かれたようにはしゃぎ出す。

皆「僕」と云う代わりに「己（おれ）」と云うのを得意にする年輩である。その自ら「己」と称する連中の口から、旅行の予想、生徒同士の品隲（品評）教員の悪評などが盛んに出た。

この興奮が高じ、停車場に出入する大人達を標的にして悪口を言い合う熱病のような「ばか騒ぎ」へヒートアップする。この昂揚した中学生グループのリーダーが能勢五十雄だった。しまいには能勢一人で、悪口を言う役をひきうけることとなる。

そのとき、グループの一人が、時間表の前に立っている妙な男を発見する。能勢五十雄の父親だ。息子をこっそりと見送りに来ていたのである。

その男は……昔風の黒い中折れの下から、半白の毛がはみ出しているところを見ると、もうかなりな年輩らしい。……服装といい、態度といい、すべてが、パンチ（＊滑稽漫画）の挿絵を切り抜いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思われない。――自分たちの一人は、また新しく悪口の材料が出来たのをよろこぶように、肩でおかしそうに笑いながら、能勢の手をひっぱって、「おい、あいつはどうだい。」とこう云った。

グループの中で能勢の父をただ一人見知っていたのが「自分」である。「自分」は思わず「あれは、能瀬のファアザアだぜ。」と云おうとした。

するとその時、
「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」（＊ロンドン乞食は気位が高く、紳士のようにふるまうと言われていた。）

こう云う能勢の声がした。皆が一時にふき出したのは、云うまでもない。中にはわざわざ反り身になって、懐中時計を出しながら、能勢の父親の姿を真似て見る者さえある。自分は、思わず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けていたからである。

作品のこの部分を、高校一年生の授業で朗読すると、教室は静まり返える。生徒達の顔に痛みが走るのである。多くの生徒が、能勢の気持ちに近い何かを経験したり味わったことがあるのだろう。

以下、その授業である。Tは私、Pは生徒である。

T「能勢五十雄は、電車の中では自分のことを『僕』と言っていた。なのに、停車場に降りると『オレ（己）』って言い出す。なぜだろう？」
P「…カッコつけている。」
P「…悪ぶっている。」
T「じゃ逆に、なぜ電車の中では『僕』って言ってるんですか。」
P「……」（答えられない。）
T「聞き直します。『僕』と『オレ』ってどう違うの？」
P「『僕』は子供っぽいけど、『オレ』は大人っぽい。」
P「『僕』は、『よい子』のイメージだけど、『オレ』は『ワルっぽい』。」
T「そこでもう一度聞きます。なぜ能瀬は電車の中では自分を『僕』って言っていたんだろう？ヒント。停車場では、『自分』だけが能瀬の父親を知っていた。これ、どうしてかな？」
P「あっ、家が近い。同じ電車に乗り合わせたし。」
P「能瀬と『自分』は幼なじみだと思います。」

T「どうして？」
P「同じ小学校の出身だって書いてある。」
T「そうだね。小学校以来の知り合いだ。だから、父親の顔も知っていた。でも、そのことと『僕』という言い方とは、どういう関係があるのだろう？」
P「能瀬は、『自分』との間では、『僕』っていう方が自然だった。」
P「小学校以来のなじみだから見栄をはる必要がなかった。」
T「ということは、停車場で『オレ』って言いだした時、能勢は？」
P「見栄をはっていた。」
P「無理をしていた。」
P「つっぱっていた。」
T「そのとおりだ。こういう心理って、みんなにもあるよね。みんなは、中二か中三くらいでこの時期を卒業しているかもしれない。昔は、ピークが中学四年生くらいだったんだ。さあ、こういう時期を何という。」
P「反抗期。」
P「思春期」

ここで、以下の説明を挿入する。

子どもの人格は、ある時期まで親や教師によってつくられる。親、教師にほめてもらうため、子どもは幼児期から必死になって「よい子」を演じる。ところがこのつくられた「よい子」のままでは、自立した人間として社会を生きてゆけない。そこである時期から子どもは「自分くずし」を始める。つくられた「よい子」の自分をこわして、「自立した自分」を生みだそうとあがき始める。だが、これは大きな冒険である。一人ではこわくて自分をくずせない。そこで熱病のように友人を求める。友人との共犯関係のなかで、はじめて自分くずしは可能になる。この時期の中学生（高校生）は、大人に対して攻撃的になる。けれど、内心はきわめてナイーブで傷つきやすく、孤立感にとらわれやすい。精神的に大きく揺れるこの時期に子どもは自立へのきっかけをつかむ。能瀬は、思春期＝反抗期の心理を哀しいほど典型的に生きている少年である。

T「能瀬が『ロンドン乞食さ！』という強烈なセリフを口にしたのは、『自分』の機先を制したんだよね。『あれは、能瀬のファアザアだぜ。』と言わせたくなかった。もし、『自分』が、あれは能瀬の父親だとみんなの前で暴露したら、まわりの生徒達は、どう反応しただろう？」
P「…しらけた。」
P「…引く。」
P「ぶっ冷め。」
T「そうだね。盛り上がった空気が一気に気まずくなったはずだ。能勢はそれが恐かった。そうなるくらいなら、死んだ方がましだと思ったのかもしれない。だから、こころならずも叫んだ、『あれは、ロンドン乞食さ。』と。…今の言葉で言えば、能瀬は場の空気を？」
P「読んだ。」
T「読み過ぎたんだね。」

「父」は、次のようなエピローグで終わる。

能勢五十雄は、中学を卒業すると間もなく、肺結核に罹って、物故した。その追悼式を、中学の図書室で挙げた時、制帽をかぶった能勢の写真の前で悼辞を読んだのは、自分である。「君、父母に孝に、」――自分はその悼辞の中に、こう云う句を入れた。

能瀬の人生は短かった。あの日、上野駅の停車場で同級生たちのヒーローとなったときが、ひょっとすれば彼の人生のピークだったかもしれない。

「自分」が悼辞のなかに入れた**「君、父母に孝に」**…、この言葉をどう考えればよいのだろう。

皮肉ではないだろう。**「自分は、思わず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けていたからである。」**とあるように、「自分」は能瀬のふるまいに、痛ましさと同情を感じている。

「あのとき、君がみんなの前で、父親のことを『ロンドン乞食！』と言わずにいられなかった気持ち、同じ思春期にいた僕にはよくわかる。でも、君が本当は、親孝行な心優しい少年だったことを僕は知っているよ。」と「自分」は言いたかったのではないだろうか。

しかし、「自分」の意図に反して結果的に、**「君、父母に孝に」**は、やはり皮肉な言葉である。心をこめた哀悼の言葉も皮肉のように響いてしまう。…ここに能瀬という人物の、いや「思春期＝反抗期」というものの持つ根源的な哀しさがある。能勢五十雄の哀しいピエロのようなふるまいとその短すぎる生涯を通して、芥川龍之介は、思春期というものの持つ名状し難い切なさを描き出したのである。

ひろい　まもる
一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

7月～8月の事業から

山海塾「降りくるもののなかで―とばり」

七月五日（金）高知市文化プラザかるぽーと大ホールで五年ぶりとなる山海塾高知公演を開催しました。

今回の演目は、二〇〇八年にパリで初演後、二〇一〇年に辛口で有名なニューヨークタイムズ紙が絶賛した演目「降りくるもののなかで―とばり」でした。

天児牛大（あまがつうし）氏率いる山海塾には、香美市香北町出身の舞踏手・竹内晶（たけうちしょう）氏がおられ、公演に先立ち帰省、プロモーションとワークショップを行い、地元のダンスカンパニーと深い交流を行いました。

公演当日、舞台後方からは千六百個の星の光が降り落ち、楕円形の舞台には二千二百個の儚き命が発光するという幻想的な舞台演出のもと、会場は山海塾独特の静寂につつまれました。その中で、八人の舞踏手は全身を白塗りにし静かにゆらいでいました。白塗りである理由は、舞台に日常を感じさせず、この世のものではないという異界性を導きだすためだそうです。

その異界性に導かれた多くの来場者から「一言もしゃべらないのに、心の中に熱いものを感じた」。「素晴らしい体の動き。人間の体と動きだけで、こんな世界を作れるなんて驚きでした」等と、見る者に衝撃と感動を与える一夜となりました。なにより通常、入場者の三割ぐらいのアンケート回収率が五割を上回っていたことが、来場者の満足度の高さを大いに物語っていました。

〈入場者数・三百六十名〉。

「MOTTAINAI キッズフリーマーケット」

七月七日（日）、高知市文化プラザかるぽーと七階市民ギャラリー第一・第二展示室にて、今年で三度目となる大人気のイベントを開催。このフリーマーケット、お店を出すのは小学校三年生～六年生。お客さんも小学校一年生～六年生の子どもたちに限定し、保護者の方は周囲から見守るだけといった、子どもの自主性を育む目的で行いました。

子どもたちは、実際のお金を使ってやりとりすることで、お金の大切さを知ることができ、収入を得るということがどれだけ大変かということを学びました。また、身の回りで必要なくなった物を誰かに使ってもらうことで物の大切さを学び、大声を出して笑顔でお客さんを呼び込みPRすることでコミュニケーション力を育むこともできました。

終了後、子どもたちの感想文には、「最初は恥ずかしかったけど、徐々に慣れてきて大声でお客さんを呼べるようになりました」「今日はあんまり売れなかったけど、また次もやりたいです」等とあり、多くの子どもたちが楽しい一時を過ごしました。

〈参加者数・一千名〉。

高知市文化振興事業団

宝くじ文化公演 仲道郁代×内藤裕敬 共同企画「窓の彼方へ」

七月十一日（木）高知市文化プラザかるぽーと大ホールにおいて、世界的ピアニスト・仲道郁代さんと、関西小劇場界の雄、南河内万歳一座の内藤裕敬さんによる音楽と演劇によるコラボレーションプログラム「窓の彼方へ」を開催しました。

不動産屋さんに案内された、大きな窓が印象的な古い部屋には、なぜかピアノが残されていました。そのピアノを奏でると浮かび上がるのは、その部屋で暮らしていた人々の思い出や、窓から見える移りゆく風景。「記憶」「短くて長い夢」「人生」…。内藤さんの紡ぐ叙情溢れるさまざまな言葉が、仲道さんの奏でるショパンの名曲に乗って、浮かんでは染みこむ素敵な舞台となりました。

本公演の開催にあたり、高知県ピアノ指導者協会のみなさんと、高知演劇ネットワーク演会のみなさんに多大なご協力をいただきました。演劇と音楽という、舞台上のコラボレーションだけでなく、制作面でも高知の文化団体のみなさんと繋がりが持てたことは非常に大きな力となります。この繋がりを活かしていける活動を今後も続けていきたいと思います。

〈入場者数・四百六十二名〉。

第六十三回高知市夏季大学

高知市中央公民館の事業として伝統のある夏季大学。第六十三回の本年は、七月二十五日（木）から八月七日（水）までの土日を除く十日間、高知市文化プラザかるぽーと大ホールで、室井佑月、マロン、名越康文、吉岡斉、御厨貴、京極夏彦、孫崎享、大竹七未、門田隆将、飯田泰之の各氏を講師に招き、連日盛況のうちに開催しました。

参院選直後ということもあり、御厨氏の政治の現状をめぐる分析・解説には受講者が頷きながら聞き入ったり、孫崎氏が客席とのやりとりを交えて語る領土問題や、吉岡・門田両氏がそれぞれ科学者・ノンフィクション作家という立場で原発事故をテーマにするなど、いずれも時宜を得た内容で、受講生の関心の高さに応えられる講演となりました。

また、京極氏や飯田氏の講演日には客席の雰囲気が変わるほど若者層が多く、「伝統」と「未来」という、夏季大学のこれからの可能性も感じられました。それぞれの分野で活躍している講師の充実した講演を聴くことができ、暑い夏のひとときを、老若男女が有意義に過ごすことができました。

〈受講者数・四千九百二十六名〉。

高知を撮る

第29回写真コンテスト入賞作品

伝える 継ながる

（平成23年10月　大豊町岩原神社）

下村　尚志

地元の神祭の一コマ。毎年こんな感じで、子供を抱いて太鼓をたたいています。

野　心

風俗歳時記

子育てに明け暮れて十八年余り。この春娘は、東京の大学に進学した。高校生の息子は修学旅行で一週間近く海外に行って、家に一人ぽつんと残された。「独身貴族だ！」とばかり、仕事が終わってからクラシックコンサートに行ったり、夜のネオン街で飲んだり、チーズケーキを食べに神戸までドライブしたり…とにかく一人でないとできないことをあれこれやってみた。が、四日くらいで飽きた。仕事、家事、子育て…日頃は分刻みで忙しくしているが、家事と子育てから突如解放されたら時間を持て余してしまったのだ。

「暇は、大切な休息」というのは、日々忙しく走り回っている人に当てはまることであって、毎日暇だとその有難さに気づかない。日々長編小説を書き進めていた時期は、仕事や家事から解放される深夜の限られた時間が非常に貴重で充実していたが、このところ、小説とも遠ざかっている。読書をしているとすぐに眠くなるし、早寝癖がついてしまうと、夜のニュースの時間に瞼が閉じる。いかに緊張感のない時間を過ごしていたのかと反省する。

そんな暇生活に喝を入れる本がある。『野心のすすめ』（林真理子著　講談社現代新書）出版後すぐに三十万部を突破した今夏のベストセラーエッセイの代表格。高知にも何度か足を運んでいる林真理子氏は、著書の中で、「毎日がつまらないと思うならその原因を突き詰め、とことん自分と向き合うこと」とした上で、「三流の世界にいると一流の世界は知らないで終わる。野心を持って上を目指せ」と叱咤する。

普通に暮らすおばさんやおじさんが野心？と訝るかも知れないが、いい意味で野心がなければ本当に人生はつまらない。「よし、私もベストセラー作家を目指すか！」無謀な夢を描いても、誰にも迷惑はかけまい。

（立花香）

第11回 詩のボクシング
高知大会だけど四国大会

詩のボクシングとは、二人の朗読者（朗読ボクサー）が自作の詩または自分自身の言葉による作品を交互に朗読し、どちらの声と言葉がより観客＝他者に届いたかを競う「声と言葉のスポーツ」、「声と言葉の格闘技」です。勝敗は会場内の観客全員が札をあげてジャッジ。

幅広い層からなるボクサーたちから紡ぎだされる「生きた言葉」の魅力を存分にお楽しみください。

●日　時：9月14日㈯　開場12時30分　開演13時00分
●会　場：高知市文化プラザかるぽーと 小ホール
●入場料：一　般1,000円（当日1,300円）
　　中高生　500円（当日800円）

お問い合わせ　高知市文化振興事業団　088-883-5071

高知市立中央公民館事業 第171回市民映画会

日時：9月19日㈭・20日㈮
会場：高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
料金：一般前売券1,300円
　（当日 1,500 円）
　割引（前売り・当日とも）
　1,000円
※学生証、長寿手帳、障害者手帳などをご持参の方は割引券をご購入いただけます。
※前売り券は、かるぽーとほか市内プレイガイドおよび指定のサニーマートで販売。

上映作品

①アンナ・カレーニナ
（2012 年／イギリス）

②マリーゴールド・ホテルで会いましょう
（2011 年／イギリス＝アメリカ＝アラブ首長国連邦）

上映時間（両日とも）

①アンナ	②マリーゴールド
10：10～	12：30～
14：45～	17：05～
19：20～	

お問い合わせ
高知市文化振興事業団
TEL 088-883-5071

今号の表紙

「移ろい」

宮﨑　夏緒

テーマは、時の移ろいです。今の生活や時間は、今しかないので、大切にしたいという思いを込めました。

また、この場所は、学校から帰る時に渡る橋の上から撮影したのですが、私は、ここの風景が好きなので撮ってみました。

（みやざき　なつお／国際デザイン・ビューティカレッジ1年生）

風俗

男性長寿日本一

器用さと熱心さを持ち合わせてもいる。

料理だけではない。掃除、洗濯、アイロンがけなど、全く苦にならないらしい。最近はとうとうミシンまで買い、初めての作品だというランチョンマットを嬉々として見せてくれた。手本にしたいものを探して写真に撮り、真似る。角の縫い方などなかなか手が込んでいて、好きを通り越した趣味の域とさえいえる。

まもなく七十歳になるバツイチの友人がいる。彼は将来、きっと男性長寿日本一になるのではと思う。それには理由がある。

まず彼は料理が大好きである。美味しそうなレシピを見かけると、スマホで撮影して翌日にはもう作っているし、外食で美味しいドレッシングに出会うと、レシピを聞き出して、すぐに作ってしまう。

彼は普通の男性が好む普通の趣味も数多いが、彼のいちばんの強みは、なんといっても細々とした日常生活を苦もなく全部ひとりで完結してしまうことではないだろうか。

「ひとりで完結」というのも妙な言い方だが、これがなかなか男には難しい。朝は自分で起きて出汁をちゃんととった味噌汁をつくって朝食を食べ、週に何度かは掃除もし、服にはアイロンもかけ、昼の弁当も用意し、夜もほとんど家で食べる。糠みそで漬け物も作るし、果実酒や梅干しをはじめとする常備食も自分でつくる。

妻の出る幕がないが、確かに随分前から妻はいなくなっていた。日常生活で、これだけ自立し自ら動けるならば、どうやら妻を必要とはしていないようである。なによりも男として日常生活の細々を苦にしていないことが、男性長寿日本一の記録を塗り替える資格充分といえそうである。

（霖）

文化高知 No.175
2013年(平成25年) 9月1日発行 【隔月発行】

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869